『一橋大学附属図書館研究開発室年報』
第 7 号　2019 年

一橋大学附属図書館における初年次教育実践への新たな道

匂坂 佳代子（学術情報課レファレンス係）
一橋大学学術・図書部

１．序

現在、大学図書館においては、学修支援は図書館が担うべき大きな役割として認識されている[1)]。その中で、情報リテラシー教育の実施は業務の一環として定着しており[2)]、そのコンテンツの一つとして、新入生を対象とした初年次教育で図書館ガイダンス等を行う館が多いことは論を俟たない。初年次教育の実施は、長年にわたる各館での実施報告が積み上がっており、各館が試行錯誤を繰り返しながら自館に最適と思われる方法を選択し実施している様子が伺える。それらの報告によれば、図書館が直接担当するパターンとして、図書館の自主開催、授業の一部を利用してガイダンスを実施する形式、そして授業科目としての開催と大きく分けて 3 つに類型化される、と慈道は報告している[3)]。近年ではそのほかに、館内のポイント数箇所にボードを設置し、学生のセルフツアーを行う館も見受けられる[4)]。

学修支援が大学図書館で行われている社会的な背景としては、平成 20 年の中央教育審議会で指摘されたとおり、グローバル化への対応や、18 歳人口の減少による大学への全入時代を迎え、体系的な教育課程の編成や教育の質保証を求められる等、大学を取り巻く環境が急速に変化したことが挙げられる[5)]。このような社会の変化を受けて、大学の機能として教育の重要性と学修支援が改めて認識されており[6)]、図書館ではそれに添う形で、大学の学修基盤をラーニング・コモンズを中心としたアクティブ・ラーニングで支え[7)]、資料収集スキルを伝えるプログラムを授業科目として行うことによりスキルの習得を学修の文脈に埋め込み[8)]、授業と連動しながら先輩学生が後輩学生に対してレポートの書き方を指導するピア・サポートを実施することにより、学生目線でのサポートを提供すると同時に指導する学生の社会的成長にも貢献する[9)]、等の情報リテラシー教育の実践を、各館で幅広く重ねている。更に、平成 30 年には、同じく中央教育審議会において、テクノロジーの急速な進化やグローバル化の進展といった時代の変化に伴い、教育の質を維持向上させ、学修者が学修の成果を実感できる教育を行う必要があると共に、社会からの要請に応えるため大学教育の質に関する情報を公開する必要があることが示された[10)]。

このように大学を取り巻く社会状況が変化する中で、大学における初年次教育は、高校から大学へ学生が学修を行う過程でスムーズに移行し、その後の学士課程の学修が滞りなく進むよう支援することを目的とする高大接続の文脈も加わり、各大学で学士課程のプログラムの見直しが進む等、対応が進められている。図書館における初年次教育の実践は、そうした状況と呼応し、既に実施している館は多いながらも、情報リテラシー教育の一環として焦点が当たっている分野である。他方で、大学図書館では従来利用者教育を行っており、その最初のステップとして新入生にガイダンスを行っていた流れを受け、更に発展させているという位置付けも見出せる。

一橋大学附属図書館では、初年次教育の取り組みとして、新入生を主な対象とした館内ツアーを 4 月に行うほかに、平成 19 年度より配置された附属図書館の専門助手との協働によって、学内の大学教育研究開発センターと連携し、同センターが採択された文部科学省平成 22 年度大学教育推進プログラム（GP）「単位実質化マキシマムモデルの実践と普及 - 評価、教育、支援をつなぐカタリストとしての IR -」の一環としてレポート・論文の書き方相談事業を実施したほか、平成 21 年度より、学部生対象の授業と連携して「アカデミック・スキルズ」と題した数回の連続講義を実施してきた。これは、全学部共通の選択科目である「学生生活の技法」という授業において、レポートの執筆を主なテーマとし、当館の専門助手と図書館職員とが分担して講義やグループワーク等を行うという取組みである [11)]。この取組みの注目するべき点としては、少なくとも著者が担当した平成 27 年度は、単なる講義に留まらず、学生に事前にレポート課題を課し、授業当日は学生がグループワークとして一人ずつ自分のレポートを発表してグループのメンバーからコメントをもらい、それらのコメントを踏まえてレポートを書き直して再提出し、その結果が成績評価に反映する、というアクティブ・ラーニングとも言うべき一連の流れが確立されていた点である。こうした講義やグループワークを行う上での分担としては、専門助手はレポート執筆の講義から採点までを行い、図書館職員は文献検索のガイダンスやグループワークの補助を行うというものだった。この一連の流れにおいて、「学生生活の技法」の担当教員とは実施前に打ち合わせを行い、教員は実施状況の報告を図書館から随時受けてはいるものの、内容について中途で関与することはなく、最終レポートの結果も図書館から送付されるといった運用であった。こうした取組みが行えたのは、平成 19 年度より導入された専門助手制度の流れを汲み、平成 24 年度より当館に附属図書館長を室長、附属図書館及び社会科学古典資料センター所属の専門助手 4 名を室員とする研究開発室が設置され、「図書館組織の中にいる研究者」としての

立ち位置を持つ、サブジェクト・ライブラリアンとして専門的な知識を持って教育にも携わる専門助手の存在 [12]が大きかった。論文作法等の指導を業務の一環として行うことができる専門助手を擁していたことから、授業教員との連携により、レポートの評価まで図書館が行えたのではないかと考えられる。

この「学生生活の技法」は、毎年夏学期と冬学期に開講されていたが、平成 27 年度をもって、残念ながら開講されないこととなった。加えて、専門助手の任期終了による退任に伴い、当館の研究開発室は業務の内容を見直し、貴重資料の整理等に重点を置くこととし、平成 30 年度に歴史的資料に造詣が深い学内の教員を室員とする体制へ再編成が行われた。このような状況の変化を受けて、当館の情報リテラシー教育活動は、それまで行っていたような、専門助手の力量に依り図書館が独力でライティング・サポートまで実施する方向から、図書館の中に組織されている情報リテラシー教育ワーキンググループ（以下、WG）を中心に、学内の教員と協働し学修支援活動を行う方向へ舵を切った。

本報告では、当館を取り巻く状況が変化する中、当館が情報リテラシー教育活動として初年次教育にどのように取り組むか改めて検討し、新たに授業の中でガイダンスを行う取り組みについて試行を経て定着させるまでの、数年間の WG 活動を記録する。

２．検討の背景

当館における情報リテラシー教育活動の位置付けは、本学の第 3 期中期目標 [13]に「学問への憧れと志を高め、学生の主体的学修活動を引き出す」と記載されていること、更に中期計画 [14]に「情報リテラシー能力を向上させ、学生の主体的学修活動を促進するため、(中略) 情報検索・資料収集方法習得のための講習会（中略）を行う」と項目立てがされていることに基づいている。これらにより、当館の情報リテラシー教育活動は、大学の学修支援活動としてオーソライズされたものであることが示されている。当館では、館内に WG を組織し、上記の中期目標・中期計画の実施に向けて種々のガイダンスの企画・実施に当たっている。

著者は、WG の主査を平成 27 年度～平成 30 年度まで 4 年間務めた。初年次には、各種ガイダンスとともに「アカデミック・スキルズ」を担当した。着任 2 年目の平成 28 年度に、前述のとおり、「アカデミック・スキルズ」は行われないこととなった。こうした動きは、平成 29 年度に 2 学期制から 4 学期制へ移行することに向けて、学部教育のカリキュラムに様々な変化がある中での、一つの動きと考えられた。

「学生生活の技法」が開講されないという最終的な連絡があったのは、平成 27 年度末だ

った。そのため、時間的に余裕がなかったこともあり、それに替わるライティング･サポートのコンテンツを一から組み立てたり新たな連携先を学内で探したりするのではなく、平成 28 年度は図書館主催の単発のガイダンスとして、1 コマの中で研究開発室員の講義とグループワークを行うという「レポートの書き方ワークショップ」[15]を開催することとした。これは、「アカデミック・スキルズ」で行っていた内容の一部を抽出する形を取ったことから、資料作成や運用の検討といった点で移行が比較的スムーズであり、混乱は少ない一方で、図書館主催のガイダンスとしては初めてとなるグループワークを取り入れることから、講義と検索実習を行っていた従来型の図書館ガイダンスとの差異化が図れるのではないかという狙いがあった。

これらの動きがある一方で、WG では、それまで行っていた新入生を対象とした館内ツアーへの参加者の落ち込みを受け、それに替わる企画として、平成 28 年度の春を目指して脱出ゲームの準備を進めていた。脱出ゲームは従来型のガイダンスとは大きく様相が異なるにせよ、新入生を主な対象として図書館の使い方を案内するというスタンスは変えず、ゲーミフィケーションを取り入れた新規の形式として、WG において館内ツアーに替わるコンテンツと位置付けた。脱出ゲームの企画から実施、更に第 19 回図書館総合展ポスターセッションへの出展と最優秀賞受賞までの経緯は、尾城の報告[16]を参照されたい。

このような状況により、平成 28 年度の春には、従来実施していたゼミガイダンス等を引き続き実施するほかに、新たな企画として、脱出ゲームと「レポートの書き方ワークショップ」を実施することとした。当館として初めて実施する脱出ゲームが、果たしてどれだけ学生の反応を得られ、館内ツアーの代替として機能するのか、その結果によって拡大の路線はありうるのか、といった点を WG は注視した。また、「レポートの書き方ワークショップ」は、平成 27 年度まで 4 回の連続講義で実施してきた内容の一部を 1 コマで行うよう抽出する形式としたことから、学生の満足度が得られるのかという点について、WG では見守ることとした。

4 月に 1 ヶ月間実施した脱出ゲームには、延べ 213 人の参加者があり、その中で正解まで行き着いた「脱出者」は 27 人という結果が得られた。この参加者数は、数値が落ち込む前の館内ツアー参加者数とほぼ同じであったため、脱出ゲームは館内ツアーの代替として一定の評価はできた。ただし、脱出者の内訳として、当初こちらが参加を見込んでいた新入生と、在学生の数が同数であるという結果であったことと、事前に要する準備の労力が大きかったことを合わせて考えると、新入生をより広く捉えるための長期的なコンテンツとして

は、新入生全体が参加しやすい方法を別に探る必要があると思われた。

平成 29 年度の学期改革を控え、平成 28 年度は学内で各部署が対応を行った年であったが、WG が注目したのは、学士課程プログラムを見直し前期・導入ゼミを拡充するという大学の方針に基づき、各学部で新入生の導入科目である導入ゼミナールの見直しや強化が進められていることだった。本学で設置されている 4 学部のうち、導入ゼミナールを全初年次生必修科目としているのは 2 学部、選択科目としているのは 2 学部であり、必ずしも全ての初年次生が履修するわけではない。しかし、図書館が導入ゼミナールの授業の一部でガイダンスを行うことができれば、見込まれる参加者数は自由参加型の館内ツアーや脱出ゲームの比ではなく、入学してきたばかりの学部生に対して幅広く統一的な知識を伝えるという目的に照らすと、初年次教育に大きく寄与できるのではないかと WG では考えた。加えて、授業でのガイダンス実施は他館でも様々な実施事例が報告されていることから、それらの報告を参考にすることで、実施イメージが比較的湧きやすく、運営もスムーズだろうと思われた。

「レポートの書き方ワークショップ」も、実施結果は好評であり参加学生の満足度は高かったものの、運営の都合上、実施回数は 1 学期につき 1 回～2 回と限られることと、自由参加型のガイダンスでは学生の空き時間と合わせることが困難であるため、必ずしも広汎な学部生に対してライティング・サポートが行き渡る訳ではない。更に、今後の学部における学士課程プログラムが見直される中で、導入ゼミナールにおいてライティング･サポートを必須とするよう検討している学部もあり、図書館がライティング･サポートにどの程度関与していけるのか、判断が難しい状況だった。

平成 28 年度に実施した 2 つの新たな企画を総括すると、脱出ゲームは当館が初めて取り入れたゲーミフィケーションを用いた初年次教育へのアプローチであり、学生の興味を惹くことには成功したが、初年次生全般を捉えるには別の方法を探る必要があるとの結論を得た。「レポートの書き方ワークショップ」は、当館の図書館ガイダンスとしては新しいアクティブ・ラーニングを取り入れた実践であり、参加者の満足度は高かったが、広くライティング・サポートを行き渡らせるには運営上の限界があり、また学士課程プログラムの見直しの動きの中で、ライティング･サポートへの図書館の参画についてはしばらく状況を見守る必要があった。

前述の「アカデミック・スキルズ」で図書館が担っていたライティング・サポートの機会がなくなった後、新たな形で図書館が学修支援を担いたいと考えた時、学内で強化が進めら

れている導入ゼミナールへ参画することは、学士課程プログラムを担当する教員に対して図書館の学修支援に対する積極的な姿勢を示すと共に、学内において図書館の存在意義を示す機会ともなると考えられた。ライティング・サポートについては既に学士課程プログラムの見直しの中で議論が進められていることを踏まえると、その時点で図書館が関与できるのは、初年次生に対して高校から大学へスムーズに移行できるよう大学での学修の基礎をサポートする高大接続の一環として、資料の探し方を伝える図書館ガイダンスであった。

このような経緯により、当館において学修支援を進める今後の方向性としては、まず導入ゼミナールにおいてガイダンスを実施し実績を積むことと、その先のライティング・サポートの展開を見据えて学部や全学的な教育組織との連携を築くことが、学内の変革の時期を乗り切り将来へ繋がる最善の道だろうと考えられた。

３．実施へ向けて

以下に、年度ごとの WG の活動内容を記す。

（1）平成 28 年度：附属図書館委員会委員へのインタビューから試行へ

7 月～9 月にかけて、WG メンバーにより、附属図書館委員会委員にインタビューを行った。附属図書館委員会は、17 名の委員で構成されており、その中から 5 研究科と 2 部局から選出された合計 7 名の委員にインタビューを行った。このうち、4 研究科は学部を持っている研究科である。このインタビューは、中期目標・中期計画に基づいて進めている図書館の事業としての情報リテラシー教育活動について、附属図書館委員会委員としての意見を伺い、導入ゼミナールでのガイダンス実施に向けての基礎資料とすることを目的として、各回 WG メンバーが 2 名ずつ、30 分のインタビューを行うというものだった。インタビュー対象者には、事前にインタビュー項目を送付していたものの、インタビュー当日は項目の順番に沿っていくというよりも、対象者が話しやすいよう、話の流れに沿う形で比較的柔軟に行った。インタビューにおいては、図書館が実施する各種ガイダンスの必要の度合いと、導入ゼミナールでの 1 コマで図書館ガイダンスを実施することについて意見と課題とを伺った。

インタビューの結果、図書館の実施するガイダンスについては好意的に捉える意見が多く、中には必要性が高いと回答した教員もいた。大学全体として情報リテラシーを周知する体制が整っていない点が課題と認識する教員や、教員・学生間の徒弟制で教えるのではなく、統一的な教育が必要と回答した教員もいた。更に、各学部とうまく連携できると良い、また、

学部の学士課程教育専門委員に相談して導入ゼミナールである程度柔軟に実施する方法もあると回答した教員がいた一方で、学部によっては、平成 29 年度以降に導入ゼミナールでライティング指導を必修化する予定の学部もあり、図書館が実施するガイダンスをどのように取り入れられるかが課題である、との指摘もあった。

このような教員からの意見を踏まえて、WG では、導入ゼミナールでのガイダンス実施の実現可能性は高いと結論付け、導入ゼミナールを含む学士課程のカリキュラムを担当する各学部の学士課程教育専門委員と調整し、できるだけ効率的に導入ゼミナールで実施する方向で検討することとした。

11 月には、各学部の学士課程教育専門委員に向けて、「貴学部における平成 29 年度導入ゼミでの附属図書館ガイダンス実施について」という伺いを送付した。この文書は、夏に附属図書館委員会委員を対象として、附属図書館が実施するガイダンスについてのインタビューを実施した結果、導入ゼミナールである程度柔軟に、かつ現在よりも多数の学生を対象として実施したら良いのではないかという助言があったため、「導入ゼミナールでの附属図書館ガイダンスの実現性について館内で検討し、平成 29 年度に試行を模索している、ついては貴学部の導入ゼミナールで附属図書館ガイダンスを実施可能であるか伺いたい」という内容だった。

その結果、4 学部のうち 2 学部（法学部、社会学部）で希望があったため、平成 29 年度は 2 学部で試行することとした。

（2）平成 29 年度：試行を経て実施へ

① 試行

平成 29 年度春には、法学部と社会学部の導入ゼミナールで、図書館ガイダンスを実施した。このうち、法学部は選択科目であったが、社会学部は必修科目だった。会場の収容人数と図書館のマンパワーとを合わせて考え、2〜3 ゼミを合同で実施するように調整した結果、法学部は 2 回、社会学部は 7 回、合計 9 回実施することとなった。以下に、平成 29 年度の実施結果を示す。

日程	回数	参加人数	担当者
4/18（火）〜4/28（金）	9	281	WG 委員（1 回につき 2 名で実施）

また、平成 29 年度の内容と時間配分は以下のとおりである。

1.「図書館の使い方と資料の探し方」講義　【40 分】
2. 館内実習　【45 分】
　・指定された図書を OPAC で検索し、館内から借りてくる。
　・指定されたテーマから OPAC を検索し、関連図書を 1 冊借りてくる。
　・論文情報と掲載情報から CiNii Article（以下、CiNii）を検索し、館内へ探しに行く。
　・新聞の刊行年月日から、縮刷版でトップ記事の見出しを確認する。
3. 実習の解説　【15 分】

教員からのフィードバックでは、「学生が提出する受講票を見ると好意的な反応であったが、実習に入る段階で、学生には図書と雑誌論文の区別がついていない者もいるため、具体的な書誌情報の例示があるとよい」という意見があった。また、「ウェブで探せる文献だけではなく、紙の文献も探せるようにしたい」との意見もあった。更に、「大学 1 年生の時に、図書館の使い方や論文の探し方を教えるのはとても大切なことであり、教員がばらばらに行うよりも、一括して行った方が効率もよく、グループワークは学生が楽しみながら図書館の使い方を学ぶ良い機会だった」との意見があった。寄せられたフィードバックからは、総じて、館内実習が有効であったこと、一方的な講義のみに終始しておらず、文献を CiNii で見つけさせるところから始まっている点が、より研究活動において必要となる実践的な能力の養成に役立っている、という良い評価が得られた。

WG では、試行し好評であったという結果から、次年度も継続して実施することを検討することとした。そして、次年度はいよいよ、全学部でのガイダンス実施を目指す、という目標を立てた。

導入ゼミナールでのガイダンスの本格実施へ向けて、WG では学内で更に調査を行うのと同時に、他館の事例調査を行った。学内外で同時に調査を行ったのは、何よりも学内の教員の意見を踏まえなければ次年度の実施には繋がらないこと、そして、とりあえず試行してみたものの、他館ではどのように取り組んでいるのか、様々なパターンを合わせて知り、担当者の率直な意見を伺うことで今後の方向性に繋げたいと考えたためである。学内での調査として行ったのは、各学部の学士課程教育専門委員へのインタビューである。他館の事例調

査では、京都大学附属図書館、東北大学附属図書館、帝京大学メディアライブラリーセンター（MELIC）へのインタビューを行った。

② 学内インタビュー

まず、学内での調査として、WG ではメンバーが手分けして各学部の学士課程教育専門委員へ、9 月～10 月にインタビューを行った。法学部と社会学部の委員へは、今年の試行についての御礼と感想を伺い、他の 2 学部（商学部、経済学部）の委員へは、今年 2 学部で試行したことを伝えるとともに、次年度実施についての感触を伺った。

その結果、試行した法学部と社会学部の委員からは、授業時間を図書館に割くことに関しては問題ないと思っており、来年度も導入ゼミナールで図書館ガイダンスを取り入れたいと考えている、との回答があった一方で、「専攻別に内容ももう少し考える必要があるのではないか」「検索精度を向上させるとともに、数多くヒットしてしまった検索結果を絞り、そこから必要かつ有益な情報を抽出する技法を身に付けさせることが今後の課題」といった課題が挙げられた。また、試行を行わなかった商学部と経済学部の委員からは、ぜひ実施したいが、担当教員へ強制はできないので、推奨の上、任意での申し込みとしたいといった回答と合わせて、「学習保証の観点からも、レポートの書き方とデータベースの使い方の両方がうまく組み合わさった形で実施できるとよいと思う」との意見があった。

学士課程教育専門委員へのインタビューの結果、全学部において、次年度の導入ゼミナールでガイダンスを実施することに対して好意的な反応が得られた。これは、4 月の試行で得られた教員からのフィードバックに加えて、WG にとっては大きな追い風となった。何よりも、学士課程プログラムを担当する教員から前向きな回答が直接得られたことは、学内で同プログラムの見直しが進む中、図書館が初年次教育へ資することについて一定の担保を得たと受け取れたからである。

③ 学外インタビュー

一方、他館の事例調査として、京都大学附属図書館、東北大学附属図書館、帝京大学メディアライブラリーセンターへインタビューを行った。この 3 館を選んだのは、各館で特徴のある取組みを行っていることから、実際の体制や運用に加え、担当者の率直な意見を伺うことで、当館がこれから目指すべき姿のヒントが得られるのではないかと考えたためである。インタビューで焦点を当てたのは、京都大学附属図書館における全学共通科目「大学図書館

の活用と情報探索」[17]について、東北大学高度教養教育・学生支援機構による高度教養教育開発推進事業「初年次のレポート作成とその指導を支援する共通教材の開発（レポート WG）」[18]及び附属図書館において開講される情報探索・アカデミックライティングに関する全学教育授業 [19]について、帝京大学メディアライブラリーセンターによる新入生の必修科目「ライフデザイン演習 I」において実施される MELIC ガイダンス [20]についてである。伺った内容は多岐に亘ったが、インタビューで重点を置いたポイントとしては、学内での教員との連携体制や連携を築いた経緯についてと、ガイダンスの実施体制についてであった。

WG メンバーが 2 名ずつ各館を訪問し、インタビューを行った。その結果をまとめて一覧し、また一橋大学での状況を合わせて、今後の方向性について WG で検討した。その結果、現在の当館の学修支援の状況としては、特にライティング・サポートについては研究開発室の専門助手の力に依るところが大きく、学内の教員との連携体制はあまり築かれていない状況がある一方で、今後専門助手の退任が続くことを踏まえると、学内の教員、特に個別の教員とではなく教員の組織との連携体制を構築する方向へ早急に動き出す必要がある、との結論となった。更に、長期的には、東北大学附属図書館のように、情報リテラシー教育を全学的な教育組織と連携して取り組み、教員と図書館職員とが対等な立場で連携し学修支援を担う体制の構築を目指すこと、短期的には各館で実施しているガイダンスのノウハウを取り入れて次年度の企画に活かすことの 2 つを平行して進め、まずは全学部での導入ゼミナールでガイダンスを実施するところから、将来的にライティング・サポートの在り方を探りたい、との結論を得た。

４．全学部で実施へ

① 実施

このような学内外での調査を経て、WG では、次年度、全学部で導入ゼミナールでのガイダンスを本格的に実施するという目標に向けて、動き出すこととした。具体的には、各学部の学士課程教育専門委員から導入ゼミナール担当の教員にガイダンス実施について周知してもらい、希望があった教員のコマについて実施する、という形となった。これは、学士課程教育専門委員へのインタビューでも指摘されたことだが、一部の学部においては担当教員によってゼミの内容が異なるためであった。そのため、WG では全学部での実施という目標を立てて準備を進めていたが、実際にどの程度の担当教員がガイダンスを希望するかは、年度末まで分からなかった。

幸いなことに、4 学部の教員からガイダンスの実施希望が集まった。全ての導入ゼミナールで統一的にガイダンスを実施することを組み込んだ学部もあったため、全導入ゼミナールのうちガイダンスを実施した授業の割合は、約 9 割という良い結果となった。ガイダンスは、1 コマにつき 2〜3 ゼミを合同で実施することにより、4 月の授業開始からできるだけ時間が経過しない内に実施できるよう、スケジュールを組んだ。

以下に、平成 30 年度の実施結果を示す。

日程	回数	参加人数	担当者
4/17（火）〜5/11（金）	23	555	全館の図書系職員 及び希望する非常勤職員 （1 回につき 2 名で実施）

平成 30 年度の内容と時間配分は、原則として平成 29 年度のものを踏襲し、教員からのフィードバックで指摘のあった点等を踏まえて多少修正する程度とした。

平成 29 年度からの変更点としては、実施回数が多くなったことと、今後の担当者の育成の意味合いもこめて、平成 29 年度は WG メンバーだけで担当していた担当者について、全館の協力体制の下で実施した点である。当館では、1 回につきメインとサブの 2 名体制で担当者を割振っており、メイン担当者は主に講義と質問受付を、サブ担当者は運営の補助を行うという分担である。メイン担当者は WG メンバーが担当することとし、サブ担当者は WG メンバー以外の図書系職員と、希望のあった非常勤職員とで割振った。メイン担当者は 1 人 3 回〜4 回、サブ担当者は 1 人 2 回〜3 回という割り当てであった。

実施の結果、教員から寄せられたフィードバックは 11 件あり、その内 10 件で「ガイダンスは有用だった」と回答された。自由記述においては、「講義だけでなく実習で手足を動かしながら学ぶという点が大変によかった」「図書館を利用する機会がまだ少ないと思われる 1 年生に、利用方法の概略を、経験的なプログラムを含めて行うことは、彼らの今後の学習プロセスにさまざまな面で役立つと思われる」等といった好意的な意見が寄せられる一方で、「日経 BP や東洋経済ライブラリなど、学生がレポート作成に使いそうなデータベースの使い方を紹介してほしい」「しいて言えば、商学部生には財務諸表データベースの使い方についても実習課題に含まれているとなお良い」といった要望が寄せられたのも、WG にとっては貴重な意見となった。

② 振り返り

本格実施を終えてから、WG で振り返りを行った。その場では、次年度は内容を大きく見直した上で、一度職員でリハーサルを行いたいという前向きな意見があった一方で、1 人 3 回～4 回という回数とはいえ、短期間に集中して実施することもあり、学生の集中する時期にサービス系のメインの業務をこなしながらガイダンスを行うのはかなり負担だった、という意見も上がった。また、教員からのフィードバックでは専門的なデータベースの使い方の紹介の要望などが寄せられたものの、ガイダンス担当者の見る限りでは、学部に入学してきたばかりの 1 年生の中には、OPAC や CiNii の検索を行うだけでも精一杯な学生も散見されるように見受けられたため、その上データベースの説明まで行っても学生は混乱するのではないか、という意見が多数を占めた。ただ、全体としては全学部で実施できたことは成功であったため、次年度も引き続き実施へ向けて準備することとし、運用の細かな点はその時のメンバーの判断で柔軟に対応していくこととした。

③帝京大学メディアライブラリーセンターの見学

振り返りを受けて、WG では、6 月に帝京大学メディアライブラリーセンターで実施されているガイダンスを実際に見学に行くこととした。帝京大学メディアライブラリーセンターへは、平成 29 年度にインタビューに伺った経緯もあり、また本学とは東京西地区大学図書館協議会[21)]の加盟館同士で近隣であること、そして何よりも、当館が全館体制で 23 回実施しただけでもかなりの労力を費やした初年次生向けのガイダンスについて、帝京大学メディアライブラリーセンターでは当館よりも少ない人数で約 160 回実施しているということであったため、ガイダンスを実際に見学することにより運用の手法を学べるのではないかと考えたためである。

帝京大学メディアライブラリーセンターへは、WG から希望を募って 4 名で見学を申込んだ。当日は、「ライフデザイン演習 I」において実施された MELIC ガイダンスの見学と、職員への簡単なインタビューを行い、次年度以降のガイダンス実施に向けた基礎資料とすることとした。

見学の結果、授業時間が異なることや学生の雰囲気がかなり違っているといった環境面での相違はもちろんあったものの、ガイダンスの構成が当館とは全く異なる点に、WG では着目した。当館では、まず講義を行い、その後に館内実習を行い、実習から戻ってきてから簡単な解説を行う、という流れでガイダンスを行っていたが、帝京大学メディアライブラリ

ーセンターでは、イントロダクションでガイダンスの目的を伝えた後に、学生を館内へ行かせ、「スカベンジャーハント」と呼ばれるゲームを解かせた後、解説と優勝チームの決定、担当教員からのお薦め本の紹介、優勝チームと担当教員との記念撮影、といった構成であった。スカベンジャーハントでは、グループ分けをして優勝チームには良いことがあると予め伝えるなど、ゲーム性を持たせる工夫がされており、講師の話術もテンポよく明るく、インタビューではテーマパークのアトラクションのアテンダーをイメージしているといった説明もあった。そのようなガイダンスの運営に実際に接すると、当館でのガイダンスは自分たちで意識している以上に「勉強」という雰囲気が強いことに改めて気づかされた。

当館でのガイダンスでも、館内実習になると学生たちは生き生きとするものの、講義の途中で徐々に退屈そうになっていく学生たちの姿は見たくない、との思いは、WG メンバー全員に共通するものだった。どのような講義であれば学生の関心を惹くことができるかという点は、資料を作成する WG メンバーの悩みの種であり、資料の改良を重ねても、根本的な解決とはならない模様であることが、もどかしかった。その点で、帝京大学メディアライブラリーセンターのガイダンスでは、OPAC の使い方や館内案内などは予め 1 枚もののリーフレットとして学生に配布し、リーフレットを見ながらスカベンジャーハントに挑ませるといった学生を飽きさせない工夫がされており、そうした点を当館も取り入れたいと、WG では考えた。当館では、OPAC や CiNii の使い方を事前に説明しなければ学生は混乱するだろうという思い込みがあったのだが、帝京大学メディアライブラリーセンターの事例を見ると、そうではなく、もっと学生のスキルを信用してもよいこと、ひとまず学生にやらせてみて、分からなければ聞きに来させるスタイルでもよいことに気づかされたのが、大きな収穫だった。

運用面でも、帝京大学メディアライブラリーセンターでは 1 名で担当することや、設営もできるだけ省力化するといった点について工夫が見られたが、少ない人数で多くの回数をこなすことについては、結局のところマンパワーで乗り切っている、とのことであり、当館でもできるだけ担当者の省力化を図るにせよ、ガイダンスの時期は業務量の増加は避けられないものとして乗り切らねばならないと思われた。

帝京大学メディアライブラリーセンターでのガイダンスを見学できたことで、ガイダンスの具体的な構成や、資料からでは分からない、学生との接し方や話し方の明るさといった点を総合的に体験でき、今後の当館でのガイダンスにどのように織り交ぜられるのか、議論の起点となった。

５．実施してみて

平成 30 年度に本格実施した結果と帝京大学メディアライブラリーセンターへの訪問結果を踏まえて、次年度以降の導入ゼミナールでのガイダンスをより安定的な運用とするため、WG では夏以降に検討を開始した。検討した点は、次の 2 点である。

まず、コンテンツを見直し、ガイダンスの構成や時間配分を修正したいと考えた。これは、帝京大学メディアライブラリーセンターの見学で得た知見を基に、「まずは講義」というスタイルを改めることに重点を置いた。

次に、当館版のルーブリックを作成することも、次年度を目指し合わせて課題とした。ルーブリックは、一橋大学附属図書館において情報リテラシー教育活動を行うにあたり、その対象者のレベルに応じて期待される行動指標や、獲得すべき能力・知識を定め、個々のガイダンスの設計・見直しに際しての基準とすることを目的とするものである。ルーブリックを策定しようと考えた理由としては、3 点ある。まず、教員との意識の差を埋めたいと考えた。これは、試行から本格実施まで 2 年間の実績を積んではみたものの、教員のフィードバックからは、分野に特化したデータベースの説明を求める等、初年次生向けには高度と思われる要望が上がっているものもあったことから、ガイダンスを実施する図書館側と、学生に受講させる教員側とで、想定するレベルと内容にずれが生じている部分があるように見受けられたため、ガイダンスで伝える範囲について予め教員に示す必要があった。次に、学生のレベルに適した内容のガイダンスとすることによって、授業の一連の流れの中で違和感なく学生へ知識が伝わり、ガイダンスの内容が学生の血肉となるようにしたかった。更に、WG の課題として、ガイダンスの講義資料を作成する際に「あれもこれも」と盛り込みがちになる傾向があったため、どこで線を引くか、客観的な指標が欲しいという理由もあった。

コンテンツの見直しとルーブリック作成の 2 点について、WG 内で分担し、まずルーブリックを策定した後にそれに沿ってコンテンツを見直すこととした。

ルーブリックの策定に当たっては、「高等教育のための情報リテラシー基準　2015 年版（国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会）」[22]（以下、基準）に基づいた。基準では、情報活用場面における行動プロセスと各段階で必要となる行動指標が示されており、アクティブ・ラーニングを進める際の行動プロセスを示すことにより、生涯にわたって学び続ける人材の育成に資するとされている。当館が具体的にベースとしたのは、基準に参考として付されている「活用体系表（例）」である。ただし、この表の項目を満たすのは将来的な目標であり、策定する段階では、当館の現状に見合った形とすることとした。

ルーブリックでは、初級・中級・上級と対象者のレベル分けを行うとともに、それぞれのレベルについて期待される行動指標を 3 つ定め、マトリックスとした。そして、現在当館で実施している全てのガイダンスについて、ガイダンスの内容を細分化し、レベルと行動指標との 2 軸からマッピングを行った。このマッピングは、講義資料の内容を指標に基づいて明示化することにより、各ガイダンスの内容が想定されるレベルに適合しているか、また全ての行動指標について触れられており偏りがないかをブラウズできることを目的とした。

マッピングの結果、導入ゼミナールのガイダンスでは、対象者のレベルが初級であるにも関わらず、全体の 3 分の 1 程度は中級の内容であることが明らかとなった。WG では、この結果から、中級の内容については講義内での比重を小さくし、スライドではなく 1 枚もののリーフレットとして配布するよう変更することにより、各々の学生が必要に応じてリーフレットを参照できる形とすればよいのではないか、と結論付けた。ただ、リーフレットの枚数が多くても、配布物に紛れてしまい学生には定着しないだろうと思われることから、リーフレットの枚数は 3 枚に絞り、ポイントを重点的に伝えるよう工夫することとした。

こうして策定したルーブリックに基づき、WG のコンテンツ担当は、1 コマの中でどのようにスケジュールを組み、各項目について伝えるポイントは何か、といった一覧表を作成した。「まずは講義」というスタイルを改めることに重点を置いたことから、平成 31 年度の内容と時間配分は、以下の案とした。

1. ガイダンスの導入【10 分】
   - ・ガイダンスの目的と、本日のスケジュールを確認する。
2. 実習 1【45 分】
   - ・リーフレットを参照し、指定された図書を OPAC で検索し、館内から借りてくる。
   - ・リーフレットを参照し、論文情報と掲載情報から OPAC を検索し、雑誌を借りてくる。
   - ・会場に戻った後、電子ジャーナルの検索課題に取り組む。
3. 実習 1 解説【20 分】
4. 実習 2【15 分】
   - ・リーフレットを参照し、CiNii の検索課題に取り組む。
5. 実習 2 解説【12 分】
   - ・解説及び、応用データベースの紹介。

このような構成とした意図としては、自ら考えることを促し知識が確実に定着することを図るとともに、実習を 2 回に分けることによって集中力を持続させ実習ごとの理解度の向上を目指す、というものだった。この構成に沿って、資料の大幅な改訂を行い、WG では 12 月に学内の図書系職員等を対象としたリハーサルを行った。

リハーサルでは、2 年間のフィードバックを基に、内容を大きく改訂したことから、実際の参加者がいる状態でタイムを計りながらランスルーを行い、内容に過不足がないかを WG メンバーと参加者の目で確認することを目的とした。当日は、本番同様に 1 コマ 105 分を参加者には確保してもらい、グループ別の館内実習も行った。このように実施したリハーサルでは、附属図書館長を始め、館内のみならず学内の資料室の職員や非常勤職員、総務系の職員も含め、幅広く 21 名の参加があった。附属図書館に所属している図書系職員には、検索課題は簡単にクリアできるものであるが、総務系の職員や当館に着任して間もない職員は課題を読み解くことから話し合っている姿が伺え、初年次生に近いサンプルと思われた。

リハーサル実施後のアンケートからは、「高校までは基本的に図書を調べものに使っていて、学術雑誌の存在は知らなかった気がします。なぜ論文なのかに触れてもらえるといいと思いました」といった、高校から大学に進学する時点で知識に差があり、そこをフォローし適切に繋ぐことが必要であるという高大接続の根本を指摘した意見も上がった。

WG では、これらのアンケート結果を振り返り、年度末までに運用や資料についてブラッシュアップをかけ、4 月から 5 月にかけての実施に備えることとした。

６．今後に向けて

当館での情報リテラシー教育活動のうち、主に初年次教育への取組みについて、平成 27 年度以降の活動を記した。振り返ると、学期改革が実施された平成 29 年度を一つの山として、学内では学士課程カリキュラムの見直しや組織再編が行われた時期であり、図書館がライティング・サポートを担っていた授業がなくなるなど、図書館はどこを目指して進むべきかが問われた数年間だったと思う。変化のスピードは速く、その中で何が最適解かを探りつつ、できるだけそこに近づけるよう道を探した、というのが実際のところである。

幸いにも、全学部の導入ゼミナールにおけるガイダンス実施という成果が得られたが、検討を始めた当初、そこを目標とするのは本学ではハードルが高いだろうと感じられていた。WG が模索を繰り返す中で、附属図書館委員会委員や学士課程教育専門委員から様々なアドバイスをいただき、結果として現段階までステップが築けたのであり、最初からゴールを見

越してマイルストーンを置いた訳ではない。本報告で示したこの過程は、図書館が学修支援を考える際、学生の教育を担当している学内の教員に寄り添いニーズを汲み上げ、図書館情報学分野の知見や動向と教員のニーズとをミックスし方向性を定めることと、大学の方針を踏まえながら教員組織と協働することが、図書館の授業への参画を生み教育の一端を担う可能性へ繋がるという実践結果を示しているのではないかと思う。

著者は、平成 27 年度から 4 年間、WG の主査を務めたが、その 4 年間ではメンバーは毎年入れ替わりがあった。図書館を取り巻く変化が進み、時には逆風を感じざるをえない状況の下、その時々のメンバーのアイデアや力量によって、種々の企画が立ち上がり、現在へ繋がっていることに感謝したい。更に、WG が試行錯誤する過程で図書館から相談を受けた教員の方々は、学修支援に対する図書館の意図を受け止め、図書館に向き合っていただいた。このことが、WG の議論を進める上での何よりの励みとなったことを記し、厚く御礼を申し上げたい。

一橋大学では、伝統的に少人数ゼミナールによる教員と学生との密な研究・教育体制を誇っているが、図書館が情報リテラシー教育を実践する際は、そのことが逆に、一定のレベルの学生を集め足並みを揃えて統一的に学修させることへの躊躇となっていた面も否めない。「アカデミック・スキルズ」の実施は、全学共通教育を担当するセンターとの連携の下に、レベルの高いライティング・サポートを図書館が実施していた事例であるが、学生の捕捉率という点では初年次生を広く捉えていたとは言い難かった。視点を変えれば、平成 29 年度の学期改革とそれに伴う学士課程カリキュラムの見直しという変化があったことによって、図書館は導入ゼミナールでのガイダンスを実施するところから、学部教育に参画するチャンスを得たとも言える。

当館では、平成 21 年度から実施してきた「アカデミック・スキルズ」の連続講義が平成 27 年度をもって終了となったことと、館内ツアーの参加者数の減少、その後の研究開発室の再編成といった複数の要因から、新たな初年次教育の方法を模索した。現時点では、初年次生へ広汎かつ統一的に知識を伝達するために、導入ゼミナールでのガイダンスを定着させるところまで漕ぎ着けた段階であり、この先はライティング・サポートをどのように教員組織と連携し体制を築くかが課題である。

ライティング・サポートについて、一つの芽となるのは、研究開発室員により開講していた「レポートの書き方ワークショップ」について、平成 31 年度は法学部の教員が講義を行い、図書館は広報や当日の運営補助を行うという形での共催が決まったことである。法学部

の教員の講義であるため、法学部生向けの内容となるが、広く学内で広報を行い他学部生の参加も認めるという形式を予定している。法学部での実施をパイロットケースとして、他学部でのニーズがあれば範囲を広げることも考えられよう。また、そのように実績を積むことで、その先にはよりシステマティックな連携も視野に入るのではないだろうか。

教員との連携という意味では、本学が重点項目として掲げる「グローバル化」への寄与を目的として開講している「英語論文の書き方ガイダンス」というガイダンスも、平成 27 年度より実施を重ね、今年で 4 年目を迎えた。このガイダンスは、本学の英語エリアという教員組織との連携によって実現している企画であり、毎回、英語エリアの教員が講義を行っている。平成 30 年度までは図書館主催の企画であったが、平成 31 年度からは、正式に共催として実施することとなった。

大学は現在、社会から学修成果の可視化を求められており、各高等教育機関ではどのような役割を果たすのかという議論がなされているところである。これを図書館までスケールダウンして考えると、卒業時に能力を保証できるよう大学として学生を育成する過程において、図書館はどの部分を教育への関与という点で担えるのか、教員へのサポートはどのように行い、そのためにどのような知識が必要となるのかという視点が必要であり、その上で各大学の方針を踏まえつつ教員と連携し、役割を分担する必要があるのではないかと思う。本学においては、学生には教員から最先端の知識を惜しみなく吸収させると共に、学修の基礎部分の支援体制を行き渡らせる、双方向からの手厚い育成を図るにはどのような分担が考えられるのかという議論が、大学から示される方針とバランスよく融合しながら、この先必要になるだろうと考える。

一橋大学は、「日本の社会科学をリードする大学へと発展し（中略）未来に向けてもこの発展の歩みを止めることなく、最先端の研究を推進しつつ、ひとりひとりの学生を大切に育成して社会に送り出す最高学府という本学の特色をより一層強め、学術研究と人材育成で社会の要請に応えていきます。」[23)]という学長見解に示されるとおり、時代を先導する研究と人材育成を行うという姿勢を示している。先端的な研究を行っている教員を世界から広く招き、研究を重点的に強化すると共に、グローバル社会に貢献し得る質の高い人材となるよう学生を育む、という大学の取組みの中で、図書館はどこに学修支援の領域を取り大学へ貢献していけるのか、広くアンテナを張って国内や海外の図書館界の動向を把握しながら、これからも教員と連携しつつ道を探っていく必要があるだろう。

（参考文献）

1) 野末 俊比古. 教育・学修支援と情報リテラシー教育 －「新しい学び」を実現する大学図書館へ－. 大学図書館研究. 2017, 105, p.1-8. https://doi.org/10.20722/jcul.1497, （参照 2019-01-28）.

2) 茂出木 理子. 学習支援としての情報リテラシー教育：これまでとこれから. 大学図書館研究. 2014, 100, p.53-64. https://doi.org/10.20722/jcul.213, （参照 2019-01-28）.

3) 慈道 佐代子. 一年次教育における図書館の役割 －図書館が参加・実施する情報リテラシー教育を考える－. 大学図書館研究. 2008, 82, p.12-22. https://doi.org/10.20722/jcul.1274, （参照 2019-01-28）.

4) 一例として、以下を示す。
早稲田大学図書館. “セルフツアー（中央図書館＆上級編）”. 2018-03-02. https://www.waseda.jp/library/news/2018/03/02/4779/, （参照 2019-01-28）.

5) 中央教育審議会. “学士課程教育の構築に向けて（答申）”. 2008-12-24. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm, （参照 2019-01-28）.

6) 1)に同じ。

7) 米田 奈穂. アカデミック・リンクという理想 : 本物のラーニング・コモンズをめざして. 館灯. 2012, 50, p.22-28. https://doi.org/10.19006/kanto.50.0_22, （参照 2019-01-28）.

8) 庄 ゆかり, 長登 康, 稲垣 知宏, 隅谷 孝洋. 大学 1 年生の文献情報リテラシー能力と図書館による情報リテラシー授業の評価. 大学図書館研究. 2011, 92, p.27-35. https://doi.org/10.20722/jcul.46, （参照 2019-01-28）.

9) 加藤 善子, 小島 浩子. 信州大学におけるレポート作成支援 : 図書館と授業との連携の試み. 信州大学附属図書館研究. 2013, 2, p. 125-133. http://hdl.handle.net/10091/16219, （参照 2019-01-28）.

10) 中央教育審議会. “2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）”. 2018-11-26. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360.htm, （参照 2019-01-28）.

11) 杉 岳志. 一橋大学における図書館と教員の協働・図書館職員と専門助手の協働. 大学図書館研究. 2012, 96, p.16-22. https://doi.org/10.20722/jcul.110, （参照 2019-01-28）.

12) 福田 名津子. 一橋大学附属図書館サブジェクト・ライブラリアンの 10 年. 一橋大学附

属図書館研究開発室年報. 2017, 5, p.83-94. http://doi.org/10.15057/28662, （参照 2019-01-28）.

13) 一橋大学. “国立大学法人一橋大学中期目標”. http://www.hit-u.ac.jp/guide/middle/pdf/H30chuki-m.pdf, （参照 2019-01-28）.

14) 一橋大学. “国立大学法人一橋大学中期計画”. http://www.hit-u.ac.jp/guide/middle/pdf/H30chuki-k.pdf, （参照 2019-01-28）.

15) 匂坂 佳代子. 平成 28 年度情報リテラシー教育活動報告 ：ゲーミフィケーションやアクティブ・ラーニングを取り入れた能動的ガイダンスへの転換と、情報リテラシー教育活動のリデザイン. 一橋大学附属図書館研究開発室年報. 2017, 5, p. 124-140. http://doi.org/10.15057/28671, （参照 2019-01-28）.

16) 尾城 友視. 平成 29 年度一橋大学附属図書館脱出ゲーム「ガーゴイルからの挑戦状」実施報告. 一橋大学附属図書館研究開発室年報. 2018, 6, p. 6-03-1-6-03-9. http://doi.org/10.15057/29417, （参照 2019-01-28）.

17) 京都大学図書館機構. “平成 30 年度 全学共通科目「大学図書館の活用と情報探索」”. 2018-06-19. https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/support/12303, （参照 2019-01-28）.

18) 東北大学高度教養教育・学生支援機構. “『東北大学 学習・研究倫理教材 Part2　東北大学レポート指南書』が出版されました”. 2017-03-31. https://www.ihe.tohoku.ac.jp/?p=13618, （参照 2019-01-28）.

19) 東北大学附属図書館. “新入生必見！図書館を使った全学教育授業ガイド‐レポートの書き方と図書館活用法を学ぼう‐”. http://www.library.tohoku.ac.jp/literacy/report2018.html, （参照 2019-01-28）.

20）帝京大学メディアライブラリーセンター（MERIC）. “図書館ガイダンス”. https://appsv.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/tos18.html, （参照 2019-01-28）.

21)“東京西地区大学図書館協議会”. http://www.tnishi.gr.jp/, （参照 2019-01-28）.

22）国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会. “高等教育のための情報リテラシー基準 2015 年版”. https://www.janul.jp/sites/default/files/2018-02/sftl201503b.pdf,（参照 2019-01-28）.

23）蓼沼 宏一. “学長見解 一橋大学強化プラン（５）：日本の社会科学の発展に向けて”. 一橋大学. 2018-03-19. http://www.hit-u.ac.jp/guide/charter/hplan.html, （参照 2019-01-28）.

『一橋大学附属図書館研究開発室年報』
第 7 号　2019 年

[Report]

A new step to design the first year experience at the Hitotsubashi University Library.

Sagisaka, Kayoko

Reference Service Section, Library Affairs Division, Department of Libraries and Information, Hitotsubashi University